



地域研究へのアプローチ ——グローバル・サウスから読み解く世界情勢——

児玉谷 史朗・佐藤 章・嶋田 晴行 編著

京都 ミネルヴァ書房 2021 年 xii+270 p.

本書はグローバル・サウスの視点を切り口とする地域研究の教科書である。本書は5部構成で、序論にあたる第Ⅰ部ではグローバル・サウスと地域研究という本書のふたつのキー概念が導入され、文献調査とフィールドワークという地域研究の方法論が紹介される。第Ⅱ部から第Ⅴ部はそれぞれ貧困、移民・難民、紛争、開発というグローバル・サウスの代表的な問題系を取り上げており、そこではアフリカの事例も多数参照されている。

第Ⅱ部は、「途上国」や「貧困」といった概念がどのように生まれ、変化してきたのか、そしてグローバル・サウスの人々の視点から貧困問題がどのように見えているのかを論じている。第Ⅲ部は「南」と「北」を越境する人の移動を扱い、うち第7章はナミビアの歴史を事例として移民・難民問題の起源について考察している。紛争がテーマの第Ⅳ部では、アフリカにおけるさまざまな紛争の歴史や背景を解説した第9章、南スーダンを事例に「民族」とは何かを根源的に問う第10章がアフリカに焦点を当てている。第Ⅴ部は、援助や国際支援の影響を大きく受けるグローバル・サウスの開発政策を検討し、国民国家を相対化する視点を提供している。本書を締めくくる終章は、ケニアとザンビアの比較研究をとおして、グローバリゼーション時代の地域研究ではリージョナル、ナショナル、ローカルの相互作用といった「地域の重層性」への視点を取り入れることが重要であると説く。以上、アフリカ関連の章を中心に紹介したが、アジア諸国の事例、そして技能実習生や沖縄など日本国内のグローバル・サウス問題も取り上げられている。各執筆者のフィールドでの経験もふんだんに紹介されており、読者は地域研究のおもしろさと奥深さに触れることができる。

本書は筆頭編者である児玉谷史朗氏の一橋大学退官記念論集として企画・編集されたという経緯もあり、各章間には「地域研究と私のキャリア」と題する卒業生によるコラムが挿入されている。各コラムからは、開発援助などグローバル・サウスの問題系に直結する職種だけでなく、どのような仕事においても、自らの価値観を相対化し、相手が置かれている文脈をあるがままに理解しようとする地域研究のアプローチが有益であることが見て取れる。研究者をめざすだけでなく、グローバル化した社会で生きるうえで地域研究を学ぶことには大きな意義があるのだ、ということ力を強く伝える一冊である。

牧野 久美子（まきの・くみこ／アジア経済研究所）

